



Tom Moxley



David Wong

レアード・ハミルトン、今ではワールドチャンピオン、クリー・スレーターに勝るとも劣らないセレブリティになった。ハリウッドパーティーに招待されたり、タブロイド誌に写真が掲載されたり、トークショーに出演したりするようになった彼だが、20年ほど前はスポンサーもほとんどな

ッグウェイブに乗るといふ新しいサーフィンのスタイル、彼とその仲間がいち早くトウインを始めたときは、周りから多くのバッシングを受けたものだった。それでも彼は自分のビジョンを信じてやり続け、今では猫も杓子もトウインという時代にもなった。この分野

“情熱で、不可能を可能に変えていく男——non stop charging”

く、ごく一部の人が彼の凄さを知らなかった時代があった。しかし、彼自身のスタイルや姿勢は現在もほとんど変わっていない。変わったといえば、時代が彼に追いついてきたことかもしれない。いや、彼はまだまだ時代の先をいっている。そして当分の間は、そのスピードはとどまることはなさそうだ。

だが、ようやく最近になって彼のしていることの凄さを理解する人も増え、それが収入につながるようになってきた。レアードは仲間、トップクラスのウォーターフォトグラファーやフィルムメーカーと組んでプロダクションカンパニーを立ち上げ、映画やコマーシャルをプロデュースするようになった。そのメンバーはすべて現場にいるもので構成されていることから、コンディションが決まったらすぐにでもスイッチが入り、全員がひとつになって行動することが出来る。このドリームチームがアメリカンエキスプレスのCMやドキュメンタリー映画、ライディングジャイアンツなどを作ったのだ。

トウインサーフィンも現在ではワールドツアーがオーガナイズされ、ツアーをフォローするトウインのプロも生まれている。ジェットスキーを利用し、エンジンの力とスピードを利用し、パドルングではドロップ出来なかったビ

としてあがめられている。だが、当の本人は今では、トウインでのビッグウェイブチャレンジになかなかスリルや興奮を感じられず、反対に大勢のメディアに振り回されているサーカスさながらのシーンに嫌気が指しているという様子だ。皆がトウインでビッグウェイブを狙っている昨今だが、今シーズンは史上最悪の冬、ビッグウェイブ不作の年だったことは皮肉としが言いがたい。レアード自身も今年は、まだ一度しかトウイン・サーフィンをしていないと言っていた。だからといって、他のサーファーたちのように待ちくたびれてイライラし、エネルギーを持って余っているようなレアードではない。

彼が今、もっぱら力を入れているのはスタンドアップパドルである。スタンドアップに関しても、レアードは10年ほど前からチャレンジし始めていた。最初の頃はごく小さな波で転がったりして不恰好な様子をさらしていた。次は何をやらかすのだろうか？ 巨大な板に乗って滑っている彼の様子を見て皆が思ったものだった。2フィートの波でバランスを失って簡単に巻かれていたレアードだが、すでにその時にはきっと、15フィートの巨大なウネリに合わせてオールを滑りでテイクオフする自分のビジョンがあったに

違いない。だから皆に笑われながらもスタンドアップ・サーフィンを続けた。そして今の彼がある。トウインもそうだったが、彼がスタンドアップパドルをものに始めたとき、周りは彼の持っていたビジョンを初めて共有できるようになる。それは、彼が実際に波に乗っている姿を見ることによってなのだが、素晴らしい可能性が見えてくるのだ。今やハワイ中、いやメインランド、世界中でもスタンドアップパドルは注目の的となり、各地のサーフショップで店頭でラインナップするようになってきた。レアードのみならず、プロロングボーダーたち、ビッグウェイバーたちも次々とスタンドアップで目を見張るライディングを見せるようになった。スタンドアップはトウイン以上のムーブメントになるのではないかと予想されている。ジェットスキーも必要なく、小さな波でも楽しめる。女性やキッズでも可能。家族で楽しめるしいるんなら誰でもこのスポーツにはあるからだ。

サーフィンの歴史の中で、レアードはすでにトウインという大きなページを開いたが、さらにスタンドアップ・サーフィンというページをここ数年で新しく開いたのである。彼ほど信念を持ってビジョンを形にすることが出来るサーファーはいない。そして誰にも感化されず自分を信じてチャレンジをし続ける人もいない。

そして彼は、80年代にウインドサーフィンのスピード世界記録を樹立したウインドサーファーでもあった。トウインを始める前はウインターシーズンにバックドアで多くのショットを残し、そのパワフルなボトムターンで目を引いた。その後もトウイン、foil、スタンドアップと、本当にとどまることをしらない。

トウインであれだけのビッグウェイブに乗ればそれで満足してしまうのが普通だろうが、それより大きい波を

「みっともない失敗や恥ずかしいところを見られることを心配してはいけない。それが前進をストップさせる一番の大きな障害でもある。僕は子供のころからカウアイで一人きりの会稽の生徒として目立ち、何もなくてもみっともない子として限られたりいじめられてきた。今でも実際に落ちこぼれたり転んだり失敗してそれを笑われるけど、子供のころのように意味もないいじめられることもなくなったからずっと条件はいいさ。そして笑われても自分の信じる道を突き進み、努力を続けていけば必ず結果が出るということ。今までいろんなことで経験してきたから、自分の本能やこれだと思えることに自信がある。ビジョンを持ったらそれを何とか形にしようとする。そのために必要な努力を惜しまない。人の意見は聞くが自分のビジョンや信条を曲げないこと、それが大事だ」

——Laird Hamilton

待っていたら何年かかるかわからない。でも彼は、自分自身に挑戦せずにはいられないのだ。なかなか来ないものを待って焦られるより、今ある状況の中でチャレンジを見つけることを選んだ彼は、スタンドアップでビッグウェイブに乗るようになった。トウインならあまりに簡単でつまらないくらいの15フィートの波でも、スタンドアップでやるものなら一気にアドレナリンが吹き上がる。この不作の冬にトウインサーファーたちがやきもきしている中、レアードは日々チャレンジを重ねてエキサイティングな冬を送っている。そして周囲のサーファーたちが気付く頃には、彼はトウインの時と同様に、誰も近づけないほどのレベルにまで達しているというわけだ。

多くの人が彼をビッグウェイブ好き、極端に言えばビッグウェイブにしか興味を持たないサーファーだと思っている。しかし彼は単にビッグウェイブが好きなのではなく、彼自身にチャレンジを課すことに魅力を感じているのではないと思う。以前レアードはこう言っていたことがある。「僕は体と精神、どちらもギリギリの限界まで使わなくてはならない行為が好きなんだ。ビッグウェイブサーフィンはそのいい例だ。ただ体が強くて判断力が無ければ上手く波に乗ることは出来ないし、強い精神力が働けば必ずその波に向かっていけないし、

ただしレアードは、ビッグウェイブと同様にビッグマウン

テンのスノーボード、スピードセーリング、騎牛など、それ以外の多くの冒険にも惹かれるのだという。それらはどれも精神と肉体をマキシマムな状態にして向かわなくてはならない行為だという。そして今、スタンドアップパドルで15フィートの波に向かうのは、30フィートの波にトウインで乗るよりずっと、精神的にも肉体的にも消耗する行為だからこそ夢中になれるのだ。そうやって彼は子供のころから自分にチャレンジを与え続け、それを克服し、そしてまた次の挑戦を見つけていった。彼の凄いいところはあるところどころとどまるがなく、満足することがないところだろう。

彼の類まれな波乗りへの才覚は、その立派な体格からくるものでも、恵まれた家庭からくるものでもないことは、彼の言葉からわかるだろう。レアード・ハミルトンが誰よりもアグレッシブにビッグウェイブに乗ることが出来るのは、誰よりも強くビッグウェイブに乗りたいという純粋な気持ちを持っているから、そしてそれを追求することが自分にとって正しいことと信じて、疑うことなく努力を続けられる精神力があるからだ。

何かやりたいことが見つかったとき、あるいはアイデアが生まれたとき、それを実現することができるかと信じること、それがすべてを可能にする一番大切な要素。レアードはそのことを知っている。

Why You Go?

Challenger

レアード ハミルトン

「史上最高のビッグウェイバー」と称される男。しかし、彼のチャレンジはビッグウェイブだけにとどまらない。常に自分の限界を押し広げようと生きている。不世出の天才にとってのチャージとは？

text by Tomoko Okazaki

THE WAVE BEYOND

世界の3大チャージングウェイブINDEX

サーフィンにおける「チャージ」という言葉に、ビッグウェイブアタックほどしっくりくるものはない。サーファーは、その巨大波をメイクすることに人生を賭けることさえ厭わない。そんなビッグウェイブを魅了してやまない、世界に名だたる3大チャージングウェイブを紹介してみよう。



TEAHUPOO TAHITI

タヒチの波のイメージを一気に「ハードコア」へと変えてしまうほどのインパクトを与えたチョーブー。15フィートを超えると、もはやバドルでのテイクオフは不可能というモンスターウェイブ。

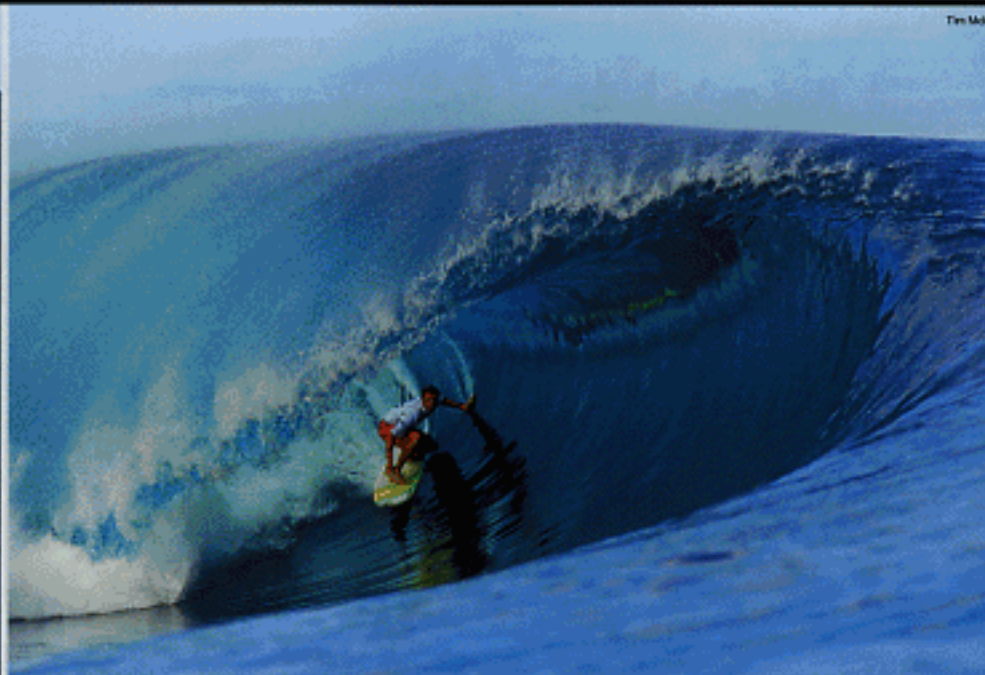
「逆さま」という意味のチョーブーは、タヒチ本島のちょうど主要道路の行き止まりにあたるタヒチ・イチという小さな半島に位置する。チョーブーという名が知れ渡る以前、背後に広がる険しい山々の連なりが2つの角の形をしていたため、ラインポイント（ラインとはサイという意味）と呼ばれていた。大半のタヒチのポイントは異なり、チョーブーはバスに囲まれたポイントではなく、狭いリーフコーナー内の岸からおよそ400メートル離れたバリアリーフ上に存在するポイントである。バリアリーフは理想的なチャンネルを形成しつつも、突如深くなるため、波の距離は短い。スウェルが10フィートを超える場合、チョーブー見学のボートの裏手で割れる凄まじいライトブレイクのタウ（別名：ケイターピラー）まで持っていかなければならない。チョーブーほど至近距離でビッグウェイブアクションを目の当たりにできるポイントには存在しない。ボート、ジェットスキー、カヤックなどが大量発生するクラグのように浮かび、そこでは無数のフォトグラファーやビデオグラファーが、世界最高峰のロケーションにて撮影チャンスを窺っている。ボ

ートが波に巻き込まれることもある。チョーブーには2つのテイクオフゾーンがあり、ファーストピークがボウルにつながることもあるが、とにかく波に乗ったら全速力で駆け抜けるように。このボウルは、チョーブーで最も手に汗握るセクションであり、分厚く膨れ上がったリップがインサイドのリーフを包み込むようにブレイクしていく。ブルーのパレルながらも、リップの下が紺色っぽくなる光の屈折こそ、タヒチウェイブの特徴であり、肝の据わったサーファーのみがパレルの出口を見つけ出すことができる。パレルセクションは、ボートで待ち構えるフォトグラファーの周辺に位置するため、セッションの度に数え切れないほどのシャッター音がこだまする。そのため、チョーブーは究極のシューティングスタジオと呼ばれている。フレンチポリネシア沿岸へ押し寄せる南～南西からの太平洋スウェルは、4～9月がシーズンとなるのだが、アウトサイドではサイドショア、インサイドではオフショアとなる南東風が吹くこともしばしばある。バリアリーフから200～300メートル離れると、海域はコバルトブルーに色づいた1,000メートルもの

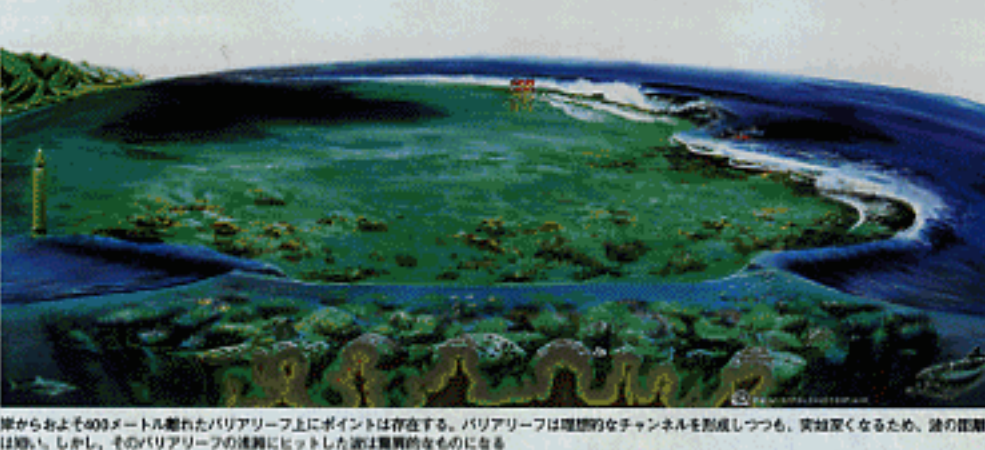
深さとなる。その地形ゆえ、スウェルは15～20秒おきにフルスピードで入ってきて、コーラルリーフの浅瀬にヒットすると目を疑いたくなるようなリップが飛び出す。そして、チョーブーでは信じられないほどの水量が巻き上げられるため、分厚いリップが形成される。その水量は、プロでさえ躊躇させるほど。プロサーファーのネコ・バダラツは、「チョーブーの波はほんとに怖かった」と告白したほどである。15フィートを超えると、トゥインサーフ以外は不可能となる。これまでで最大級のスウェルがヒットしたのは、ちょうどWCTイベント開催前の2005年5月1日で、20～25フィートあったと言われている。1997～2005年まで、毎年チョーブーにチャージしていたフレンチサーファーのディディエ・ピテ（35歳）は、チョーブーとパイプラインを比較してこのように話してくれた。「チョーブーはパイプよりもブレイクを予想しやすいんだ。一番の難関であるドロップさえ決めれば、あとはパレルを満喫するだけさ。最後のボウルセクションのパレルなんか最高のご褒美って感じだから、ストールさせてパレルから見える景色を楽しめるよ」。



15フィートオーバーとなると、トゥインサーフ以外のライディングは不可能となる。また、トゥインの出現により、これまでの限界が破られ、サーファーはよりディープなポジションを狙うようになった。マン・ア・ドロレット



（上）「一番の難関であるドロップさえ決めれば、あとはパレルを満喫するだけさ」と、ボウルセクションを深くをライドするディディエ・ピテ（中左）「チョーブー」とは「逆さま」という意味。タヒチ本島の主要道路の行き止まりにあたる小さな半島に位置する（中右）写真、チョーブーに挑むサーファーたち6'10"ほどのボードでチョーブーにチャージしているが、昔は7'4"くらいが主流だった（下）突如のシューティングスタジオと呼ばれる理由は、パレルセクションがシューティングポイントにばいたため



岸からおよそ400メートル離れたバリアリーフ上にポイントは存在する。バリアリーフは理想的なチャンネルを形成しつつも、突如深くなるため、波の距離は短い。しかし、そのバリアリーフの浅瀬にヒットした波は驚異的なものになる